

国土調査課

保存用

周防灘周辺開発地域

土地分類基本調査

字 部 東 部

5 万 分 の 1

国 土 調 査

山 口 県

1 9 7 2

序 文

最近の、わが国の経済発展は、その発達史上前例がなく、特にその進度は加速的であり、同時に都市、農村、漁村において過密・過疎現象を生み、深刻な社会現象を生じてまいりました。限定された国土に、このような二つの現象が生じてきたことはたいし、これを計画的にかつ合理的に利用することが、いまのわが国にとって緊急かつ重要な課題となってきたのであります。

このような現況と、将来におけるわが国経済社会の基本的発展方向を示唆するため、地域の特性に応じ、人間と自然の調和をはかりながら国土を有効に利用し、開発し、保全するための新全国総合開発計画が、昭和44年5月に策定されたのであります。

当県の西端部に位置する周防灘周辺地域および長北地域は、気候的な自然条件にも恵まれ、特に前者は山口・福岡・大分各県にまたがり、本州と九州を連絡する交通上の要衝でもあるなど、その立地条件はすぐれ、これが当地域を生活圏とする住民に及ぼすメリットは計り知れないものがあるにもかかわらず、地域が広く、3県にまたがるなどして、その総合的利用の検討はされなかったのであります。今回、国土調査事業の一環として、新全国総合開発計画に基づいた開発プロジェクト単位に、地形、表層地質、土壌等の土地条件、気象条件、土地利用現況、土地保全条件ならびに開発規制因子等を科学的、かつ総合的に調査し、その実態を明らかにするため、当県においては昭和47年度以降、これら開発地域土地分類基本調査を実施することになったのであります。

このような観点から、「宇部東部」図葉の地形、表層地質、土壌およびその他の土地条件について調査をおこなったので、この結果を有機的に組み合わせ、自然の実態を正確には握したなかで土地資源の開発、保全、合理化、高度化のため、広く関係者が利用されることを切望する次第であります。

なお、調査にあたっては、開発地域土地分類基本調査事業として、経済企画庁の助成と調整を得て、山口県開発地域土地分類基本調査作業規定に基づき、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図を基図として、図簿の作成、資料集収をおこないましたが、これに、ご協力いただきました各位に対し、深く謝意を表する次第であります。

昭和48年3月

山口県農林部長 松 永 常 一

調 査 担 当 者

総括企画調整編集	山口県農林部農地課	課長	中原 泉
		国土調査係長	木村 喜保
	併任山口県教育庁総務課	指導主事	宇多村 讓
地形分類調査	山口大学	教授	小野 忠熙
		助教授	三浦 肇
表層地質調査	山口大学	教授	高橋 英太郎
		〃	河野 通弘
		〃	岡村 義彦
		〃	村上 允英
土壌調査	山口県農業試験場	環境部長	坂上行 雄
		地力保全室長	井尻 敏文
	山口県林業試験場	専門研究員	藤原 俊廣
傾斜区分図	山口大学	教授	小野 忠熙
		助教授	三浦 肇
水系谷密度図	山口大学	教授	小野 忠熙
		助教授	三浦 肇
土地利用現況図	併任山口県教育庁総務課	指導主事	宇多村 讓
開発規制図		指導主事	宇多村 讓

目 次

序 文

総 論

I 位置および行政区画

- 1 位 置..... 1
- 2 行政区画..... 1

II 地域の特性

- 1 自然的条件..... 2
- 2 社会経済的条件..... 3

III 主要産業の概要..... 5

IV 開発の現状..... 6

各 論

I 地形分類

- 1 地形の概要..... 7
- 2 地形細説..... 7

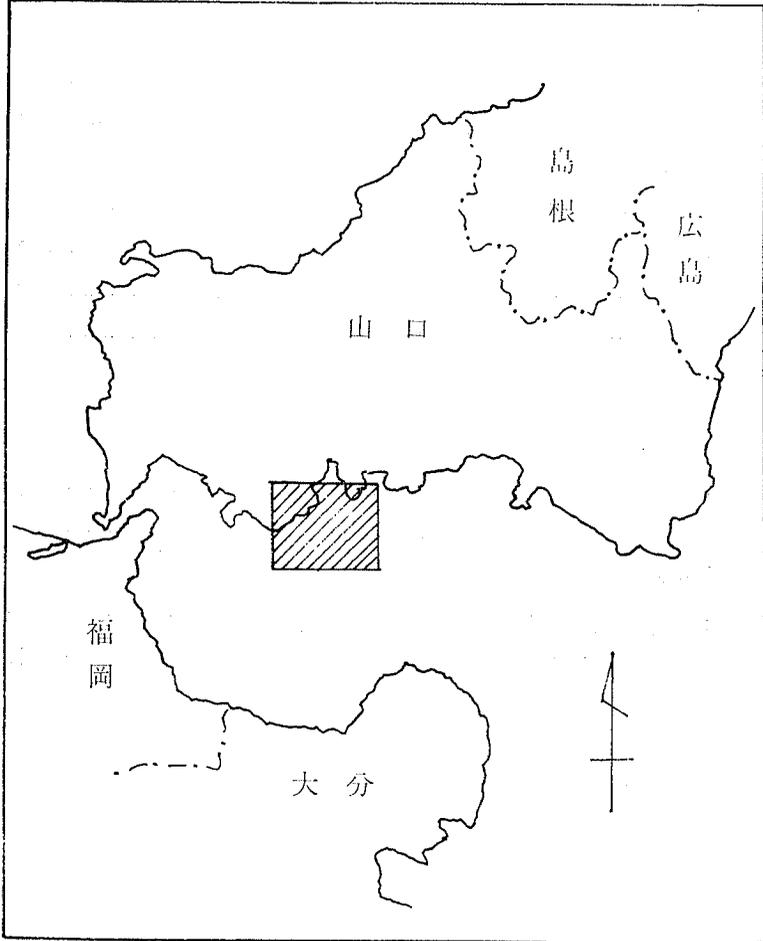
II 表層地質

- 1 表層地質の概要..... 10
- 2 表層地質細説..... 11

III 土 壌

- 1 土壌の概要..... 13
- 2 土壌細説..... 14

「宇部東部」位置図



I 位置および行政区画

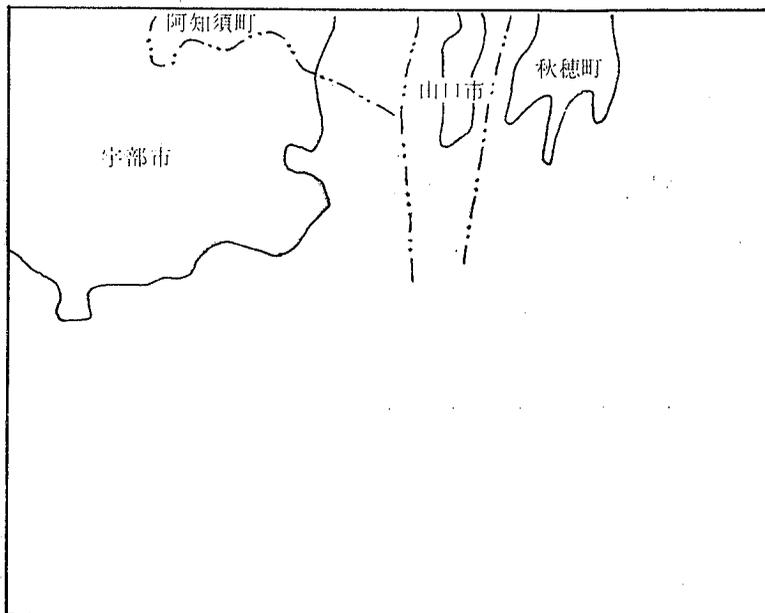
1 位置

「宇部東部」図葉は、本州西部に位置し、経緯度は、東経131°30′～131°15′、北緯33°50′～34°00′の範囲で、図葉内の陸地面積は70.14Km²である。

2 行政区画

本図葉内の行政区画は、宇部市、山口市、阿知須町および秋穂町よりなるが、宇部市を除く他の市・町は「小郡」図葉内で述べるものとして当図葉内の説明から除外する。

行政区画



Ⅱ 地 域 の 特 性

1 自然的条件

(1) 気象条件

当図葉内には、宇部観測所があり、北西の隣接地域に船木観測所がある。年平均気温は15°～16°Cで、年間降水量は沿岸部で1600～1700mm、冬期少なく梅雨台風期に集中している。東部の秋穂町は、瀬戸内側気候区に属しているが、宇部地区は、冬季の季節風時は北西風の吹きつけのために曇天が多く、日本海側気候区となっている。

当地域には、畑田が多いが、これは天水あるいは沼地から灌がいさされているので、土壌の性質と関連し、干ばつの気象災害をうけやすい。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
平均気温	4.6	5.2	8.1	13.2	17.6	21.4	26.0	27.3	23.4	17.4	12.3	7.1	15.3
最高気温	8.6	9.5	13.0	18.2	22.4	25.6	29.5	31.3	27.6	22.5	17.3	11.7	19.8
最低気温	0.5	0.8	3.1	8.1	12.8	17.1	22.4	23.2	19.1	12.2	7.3	2.5	10.7
降水量	73	71	94	153	178	281	258	123	202	75	70	62	1640

資料：全国気温・降水量月別平値表 (単位 気温°C 降水量mm)

観測所の位置

観測所名	所在地	設置箇所	北緯	東経	海拔
宇部	宇部市中字部	宇部農芸高校	33°58.2′	131°16.3′	7m

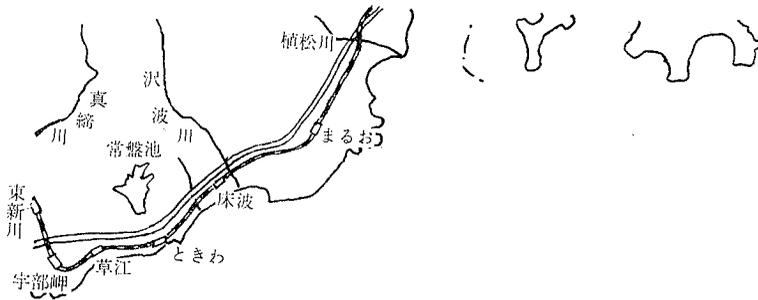
(2) 土地条件

本図葉内は、東端の秋穂半島の152mの山地を最高とし、一般に平坦で丘陵と台地が大部分を占め、その平坦地は県下でも稀れな畑作地帯を形成する。特に、宇部市東部には、高位から下位には王子面、古殿面、丸尾原面と呼ばれる、3段の海成段丘が発達している。

地質は、三郡本山変成岩類とそれを貫ぬく蛇紋岩、さらに両者に貫入し熱変成を与えている白亜紀の花崗岩、それらを基盤とする第三紀および洪積世の礫岩・砂岩・泥岩それに一部火山灰から成る。

河川は、特に大きいものはなく、南方に流れ、瀬戸内海に注ぐ。

主 要 河 川 図



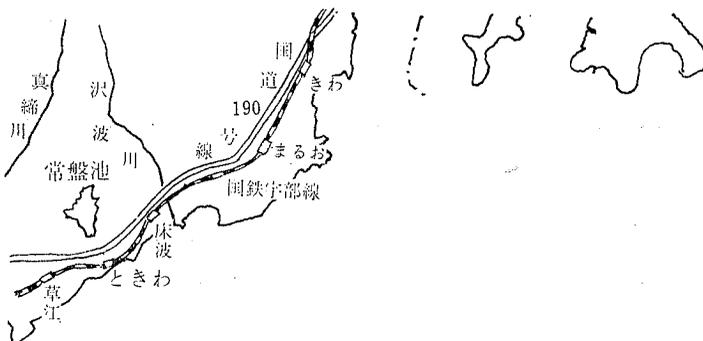
2 社会経済的条件

(1) 道 路

国道1路線，一般県道4路線がこの地域の主な道路である。

国道・地方道とも，各地で拡幅・整理が実施あるいは計画されている。そのうち主なものは，国道190号線では岐波拡幅，阿知須バイパスおよび佐山拡幅などがある。

道 路・鉄 道 位 置 図



(2) 空 港

昭和41年に開港した宇部空港は 1,200mの第3種空港であり、県内唯一の空港である。空港の利用状況は、乗降客・貨物量とも著しい増加を示し、現在利用客をさばききれない状況にあるため、施設の拡張をおこない、一刻も早く、大型機の就航が待たれている。

宇 部 空 港 の 利 用 状 況

年 度	利用者数	増 加 率	貨 物 量	増 加 率
42	29,371	100	123.2 t	100
43	42,049	145	177.3	144
44	75,438	259	209.2	170
45	108,819	371	240.4	195

(3) 人口の動き

本「宇部東部」図幅内では、宇部市の東部の東岐波・西岐波地区が主として図幅の大半を占めるため、宇部全般については「宇部」図葉内で述べるものとして、ここでは東岐波・西岐波地区のみの人口の推移について説明するものとする。

当地区は、宇部市の中心街から西岐波地区が4 km、東岐波地区が8 kmのところであり、その増減率は、前者が世帯数で36.9%、人口25.0%を示めし、後者が世帯数10.3%、人口46%でいずれも増加の傾向を示している。

これは、当地区が、宇部市のベッドタウンとして発展しつつあることをあらわしているが、この時点においては、その発展距離は4 km内がいちじるしく、その距離の遠くなるにしたがい、増加の傾向は漸増的であるといえる。

関 係 地 区 の 人 口 の 動 き

地区	昭 和 4 0 年				昭 和 4 5 年				増 減 数		増 減 率 %	
	世帯数	人口	男	女	世帯数	人口	男	女	世帯数	人口	世帯数	人口
東岐波	1,636	7,485	3,585	3,900	1,805	7,834	3,733	4,101	169	345	10.3	4.6
西岐波	2,664	11,378	5,553	5,825	3,648	14,224	6,875	7,349	984	2,846	36.9	25.0

Ⅲ 主要産業の概要

宇部市の主要産業としては、「宇部」図葉で述べるものとし、当「宇部東部」では、西岐波、東岐波地区の産業は農業が主体であるため、その推移についてのデータを示す。

専業別地域別農家戸数の推移

地区	年度	農家総数	専業	推移	
				総数	専業
西岐波	35	760	189	100	100
	40	662	120	87.1	63.5
	45	643	95	84.6	50.3
東岐波	35	785	178	100	100
	40	755	90	96.2	50.6
	45	732	66	93.2	37.1

農林業センサスによる

地区別経営面積別農家戸数の推移

地区	年度	0.5未満	0.5~1.0	1.0~1.5	1.5~2.5	2.0~2.5	2.5以上
							2.5以上
西岐波	35	346	174	155	69	14	2
	40	279	173	128	68	10	1
	45	293	156	119	64	22	6
東岐波	35	346	241	133	57	8	1
	40	334	220	130	61	6	1
	45	330	224	116	42	9	3

農林業センサスによる

農用地の減少

単位ヘクタール

地区	田			畑			樹園地			草地		
	35	45	45/35	35	45	45/35	35	45	45/35	35	45	45/35
西岐波	294	274	93.2	232	160	69.0	1	34	3,400	1	1	100
東岐波	352	344	97.7	184	134	72.8	2	6	300	1	1	100

農林業センサスによる。休耕地を含める。ヘクタール以下は切捨。

地区別乳牛飼養戸数と頭数の比較

地区	昭和40年		昭和45年		増 減		増減率(%)	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数
西岐波	25	76	20	102	-5	26	-20.0	34.2
東岐波	7	25	7	33	0	8	0	32.0

宇部市農林水産課調べ

地区別豚飼養戸数と頭数の比較

地区	昭和40年		昭和45年		増 減		増減率(%)	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数
西岐波	16	89	20	331	4	242	25.0	271.9
東岐波	125	887	109	1,676	-16	789	-12.8	89.0

宇部市農林水産課調べ

IV 開 発 の 現 状

本図業内の、ことに西岐波・東岐波地区においては、前述の農業のデータからみても2.5ヘクタール以下の農家は西岐波で6戸、東岐波で3戸とその規模は小さく分散的で、婦人労働依存であるため、副業的な実態である。

一方、当地区は宇部市の商工業ないしは市街に近く、国道190号線がバイパスあるいは拡幅などで整備され通勤に便利のため、宇部市のベッドタウンとして発展しつつあるといえる。

(宇多村 議)

各 論

I 地 形 分 類

1 地形の概要

本図幅は丘陵と台地が大部分を占め、秋穂半島の一部も見られる。小郡図幅の南に接し、地形分類でも同図幅に見られるものとほとんど同じで、その一部あるいはその連続する部分をなしている。

地形の性状と分布を説明するために次の地形図に区分した。

I 山地

I a 秋穂山地 I b 霜降岳山地

II 丘陵地

II a 宇部丘陵

III 島および陸繋島

III a 竹島 III b 秋穂陸繋島群

IV 台地・低地

IV a 大海低地 IV b 秋穂低地 IV c 阿知須低地
IV d 岐波低地 IV e 宇部台地 IV f 宇部低地

2 地形細説

I 山 地

I a 秋穂山地

本図幅には秋穂山地の一部が見られる。主として黒雲母花崗岩からなる小起伏山地で、傾斜は 20° 以上を示す。山頂付近に 30° を超える部分もある。山麓には崖錐性の砂礫層の堆積するところが多い。赤石鼻、草山崎の半島先端部は三郡変成岩類の黒色片岩などからなり、顕著な海食崖をつくっている。

I b 霜降岳山地

霜降岳山地の南端の一部があらわれている。高度100m前後の小起伏の宇部丘陵よりやや高く残丘となってそびえ、およそ高度100mを境としてそれ以上で 20° 以上の傾斜を示している。

Ⅱ 丘陵地

Ⅱ a 宇部丘陵

厚東丘陵（小郡図幅）に連続する同じ性質の丘陵地で、起伏量は100m/1 ㎞以下である。低位準平原の一部をなす侵食平坦面をあらわすものと考えられ、黒色片岩、蛇紋岩、黒雪母花崗岩、第三紀層などからなる地層を一様に切って発達し、その縁辺では高度30～50mで海成段丘（宇部台地）に漸移している。こうした老年期丘陵においては、無従谷の発達に見られるように、断層系や節理系のような地質構造の制約は地形上顕著にはあらわれなくなるが、宇部丘陵では厚東丘陵に比べて、全般に北東方向の小河谷が卓越する。また中山北方付近では南北方向の谷線の配列が目立つのは、地質構造の影響がなお残っているためと考えられる。

Ⅲ 島および陸繋島

Ⅲ a 竹島

秋穂湾の沖合の小島で、最高22m、黒色片岩からなる。南東岸は磯浜であるが、北西岸は砂浜海岸となっている。

Ⅲ b 秋穂陸繋島群

岩屋半島と花香半島はともに砂州によって陸繋島化したもので、とくに岩屋半島は美濃が浜の砂州によって長浜半島に繋がっているが、小郡図幅でも述べたように長浜半島も陸繋島で、連続した陸繋島としてきわめて稀な例であろう。岩屋半島、花香半島ともに海運に便利な花崗岩採石場として知られている。

Ⅳ 台地・低地

Ⅳ a 大海低地

大海湾、青江湾にのぞむ沿岸低地に連続する中道湾頭の狭い低地である。本図幅内には高度10mばかりの低い洪積台地と湾頭の砂堆地が見られる。

Ⅳ b 秋穂低地

秋穂湾沿岸地の一部をなし、5～10mの低い洪積台地と砂州、干拓地からなる。干拓地は天保3、4年（1832～1833）に開かれた水田地であるが、現在では県種苗センターの養魚地として利用されている。

Ⅳ c 阿知須低地

井関川河口部の阿知須干拓地の一部と日ノ山東麓に、高度10mの低い海成段丘が見

られる。

IV d 岐波低地

東岐波の植松川や西岐波の浜田川、沢波川の低地である。これらは、宇部丘陵や宇部台地を開析する小河川の一つつた谷底平野や三角州と砂州からなる。とくに東岐波では明瞭な3列の旧砂州（浜提）が認められ、丸尾や白土、床波でも河口部（あるいは谷口部）に規模は小さいが高度5 m前後の砂堆地が三角州低地を閉塞するような形で分布している。

IV e 宇部台地

宇部台地は佐山（小郡図幅）から宇部にかけて発達している海成段丘で、その南半部が本図幅に見られる。この台面は小侵食谷によってこまかく開析されているので、地形上かなりの起伏を示しているが、広い平坦面を保存するところもあって、それを基準として段丘面の対比が行なわれている。

高位段丘は王子面とよばれ、東岐波の王子北西の高度40 mの台地によって代表される段丘面でクサリ礫層がのっている。常盤池北方淵付近の高度50 m前後の台地面もこれに相当する。王子面は面積的には狭く、分散し局地的である。

中位段丘はもっとも広くあらわれており、吉南層の砂礫互層からなる古殿面とその侵食面に堆積した火山灰層や砂質粘土層からなる丸尾原面とがあって、二段に分かれる。古殿面は東岐波の古殿付近の高度20～25 mの台地面で代表され、西方に及んでやや高くなり、常盤池付近では30～35 mの台地面がこれに相当する。なお古殿東方の黒崎の台地や前田北東方の台地は高度30 mで、古殿面よりやや高いが、前者は主として蛇紋岩、後者は花崗岩からなり、岩石台地の特徴を示している。丸尾原面は高度10～15 mの丸尾原付近の台地面をさし、床波付近では10～20 mの台地となり、宇部ではこの地形面の開析が進み、開析谷に谷底平野が入りこんでいるが、なおよく平坦な台地面が残り、小串、中宇部から上宇部にかけては高度10～20 m、沖宇部付近では高度10～15 mの台地をなしている。とくに宇部ではこの上位の段丘面と下位段残丘面の比高が大きく、その間に比較的広い傾斜面をもっており、この部分に黒色片岩や蛇紋岩などの基盤岩があらわれている。

IV f 宇部低地

谷底平野と三角州平野や旧砂州、埋立地などからなる。宇部岬付近から北西にのび

る2列の幅約600mにおよぶ旧砂州は高度2~4mで、現在市街地がのっている。その海側の埋立地は工場地帯となり、内側には三角州平野や谷底平野が続くが、市街地化が進んで、水田として残されているところはしだいに少なくなっている。

資料

- 1 貝塚爽平(1950):中国地方西部の地形 東大地理学研究 No.1 P87~98
- 2 小野忠熙・河野通弘(1964):本州西端部の海岸段丘 第四紀研究3巻5号 P249~263
- 3 河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙(1965):本州西端部海岸の洪積層とその問題 山口大学教育学部研究論叢14巻2部 P17~34
- 4 高橋英太郎・河野通弘(1968):山口県における第四系一主として洪積統一と対比について 山口大学理科報告18巻 P37~46
- 5 河野通弟・小野忠熙(1967):中国地方西部の第四系,日本の第四系 P377~391
- 6 小野忠熙(1963):本州西端地方における海岸砂丘の形成層の研究,地理学評論36巻7号 P391~411
- 7 桑代勲(1959):瀬戸内海の海底地形 地理学評論32巻1号 P24~35
- 8 松本繁樹(1961):宇部市周辺海域の沖積統下底面の地形 地理学論評34巻11号 P596~609
- 9 松本繁樹(1962):宇部付近の海岸段丘東北 地理14巻

(三浦 肇・小野忠熙)

Ⅱ 表 層 地 質

1 表層地質の概説

西北側の山地は三郡変成岩類,蛇紋岩,花崗岩よりなり,このうち三郡変成岩類および蛇紋岩はENE—WSWの方向の分布を示している。花崗岩にはN20°~30°W方向の断層の発達が著しい。

東南側の丘陵および台地にはところどころに基盤の三郡変成岩類、蛇紋岩、花崗岩、古第三紀層が突出し、あるいは岩石段丘を作り、これらを不整合に被うて広く洪積層が水平に近く堆積段丘を作って分布している。

沖積平野は砂、礫砂よりなっている。

地層および岩石一覽表

地質時代		地質系統		表層地質分類	
新 生 代	第 四 紀	沖積世	沖積世	砂 礫・砂	未固結堆積物
		洪積世	吉南層群 王子礫層	礫・砂・粘土	
	第三紀	宇部層群 宇部夾炭層 岐波層	礫岩・砂岩・泥岩互層	固結堆積物	
中生代	白亜紀		花崗岩	花崗岩	深 成 岩
古 生 代			輝綠岩 蛇紋岩	輝綠岩 蛇紋岩	
			三郡變成岩類	綠色片岩 黑色片岩	變成岩

2 表層地質細説

I 未固結堆積物

I a 砂 (S)

海岸沿いに発達する。

I b 礫・砂 (gs)

谷底平野ならびに丘陵および台地沿いの平野を構成する。

I c 礫・砂・粘土互層 (gsm)

礫・含礫砂・含礫粘土質砂, シルト, 粘土の互層で, 白色および褐色火山灰を夾む。王子礫層, 含礫粘土質砂はくさり礫化している。

II 固結堆積物

II a 礫岩・砂岩・泥岩互層 (alt gsm)

礫岩, 含礫砂岩, 砂岩, 泥質砂岩, シルト, 泥岩の互層に石灰, 白色火山灰を夾む。礫岩, 砂岩は固結するが, 泥質砂岩, シルト, 泥岩は半固結である。

III 深成岩

III a 花崗岩 (Gr)

広島型の粗粒～中粒の黒雲母花崗岩を主とし, 中央北部の上片倉北方の一部にやや優白質の粗粒花崗岩が分布する。前者はマサ化が著しい。とくに西半部において甚だしい。

III b 斑禰岩質岩石 (Gb)

上片倉西方で黒色片岩中わずかに分布し, 塊状である。

III c 蛇紋岩質岩石 (Sp)

塊状のもの, 片状のもの, 角礫状のものがあり, 後二者は海岸沿いのものに発達する。北部で花崗岩に接する部分は熱変成をうけている。蛇紋岩上には厚さ1 m上の栗色粘土が被っている。

IV 変成岩

IV a 緑色片岩 (Gs)

黒色片岩にわずかに夾在しているところがある。ややまとまっているのは東北部の黒崎の蛇紋岩中に夾まれるものである。

IV b 黒色片岩 (Bs)

普通の黒色片岩のほかに, やや砂質のものもある。北方の花崗岩に接する部分ではホルンフェルス化をうけている。

V 応用地質

V a 鉱床

次の鉱山がある。

鉱山名	所在	鉱石
片倉鉱山	宇部市上片倉	けい石, 長石

V b 温泉および鉱泉

次のものがある。

温泉・鉱泉名	所在	泉質
菅倉鉱泉	秋穂町菅倉	放射能泉
片倉鉱泉	宇部市西岐波	弱食塩泉

資料

- 1 経済企画庁（1969）：土地分類基本調査（防府）
- 2 経済企画庁総合開発局（1973）：縮尺1/20万土地分類図（山口県）

（高橋英太郎 河野通弘）
（岡村義彦 村上允英）

Ⅲ 土 壤

1 土壤の概要

I 山地・丘陵地域の土壤

周防灘に面した宇部丘陵と秋穂湾につきでた半島部の丘陵地がここでの対象地域となっている。宇部丘陵は、柔順な起伏を示す老年期の地形をなし、100~200mの浸食平坦面で北部から花崗岩・結晶片岩・蛇紋岩・第三紀層となり、洪積台地へと移行している。この地区の土壤は、花崗岩を母材とする乾性褐色森林土壤と、結晶片岩・第三紀層を母材とする黄褐色の乾性褐色森林土壤・結晶片岩・第三紀層からなる丘陵地の、尾根の凸部に広く分布する赤褐色の乾性褐色森林土壤、および蛇紋岩を母材とする暗赤色土壤が分布する。また、秋穂地域の半島部は、花崗岩を基盤とする大起伏丘陵よりなり、山腹から尾根筋にかけて乾性褐色森林土壤が、山麓緩斜面には赤褐色の乾性褐色森林土壤が、出現する。

そのほか、小面積であるが、山頂平坦面には赤色土壌が出現する。

これらの丘陵地は、いずれも常緑広葉樹を下木とするアカマツの二次林で、経済林としての利用度は低い。

II 台地・低地地域の土壌

図幅内における台地・低地地域は、洪積層、三紀層の台地および丘陵地凹部にみられる低地、植松川、真締川等小河川による河成沖積地、海岸部の海成沖積地と埋立地から形成されている。

この地域に分布する土壌は9土壌統群に大別され、さらに13土壌統に細分された。

台地は赤色土壌と黄色土壌が分布し、土性は主に強粘質である。

丘陵地間凹部にみられる崩積の影響の大きい低地土壌は、主にグライ土壌や細粒グライ土壌からなり、小河川による河成沖積地はグライ土壌や灰色土壌が多い。一方海岸部に分布する海成沖積地では、粗粒グライ土壌や砂丘未熟土が散在している。

2 土壌細説

I 山地・丘陵地の土壌

乾性褐色森林土壌

花崗岩類からなる低山・丘陵地の、尾根筋から山麓にかけて広く分布する乾性土壌で、未熟ないし受食土的性格の強い、砂質の土壌である。

I a 右田岳1統 (Mig1)

全土層が浅く、砂礫質で、A層を欠く場合がある。表層には菌糸が混在することが多く、A-M層となり、常白色となるものが普通である。A層は非常にうすく、下層は淡色で砂質の土壌が堅密に堆積している。

I b 右田岳2統 (Mig2)

この土壌は、右田岳1統と同一地域の、斜面から山麓に広く分布する乾性土壌で、上記1統に較べて土層が深く、A層に菌糸の混入はみられない。全土層は砂礫質で、淡色を呈し、やや未熟な感じが残っている。

乾性褐色森林土壌 (赤褐系)

低山および丘陵地の、比較的広い尾根に分布している。とくにこの図幅では、第三紀層

および結晶片岩からなるところに分布する。

I c 宇部1統 (ube1)

第三紀層を母材とする、やや未熟な赤褐色の乾性土壌で、腐植層が薄く、B層以下は堅密な堆積を示す場合が多い。したがって、化学性や理化学性も劣り、林木の成育は良好ではない。全土層は比較的厚く、しかも緩斜面にあるため、果樹園と牧草地に利用することが容易である。

I d 小野統 (Ono)

第三紀層以外の岩石を母材とする赤褐色の土壌で、赤色土化した基盤が表層の土壌化により、赤色が退色して褐色森林土に近づいたもので、一般に埴質で、堅密な堆積を示めすものが多い。A層の厚さは、あまり厚くなく、B層への腐植の浸透の悪い、未熟な形態をもつ土壌である。林木の成育は不良で、経済林としての価値は低い。

乾性褐色森林土壌 (黄褐色)

低山地の尾根筋や、凸型斜面の上部および丘陵地の中腹斜面に出現する、黄褐色の乾性土壌である。

I e 宇部2統 (Ube2)

第三紀層を母材とする丘陵地の斜面に出現する乾性の土壌で、赤色風化層が斜面下部へ崩落するさい、新しい母材と混合したり、腐植の混入により黄褐色の色調を呈するものである。一般に、埴質で緊密な土層のため、理化学性が劣り、林木の成育は不良である。

I f 大平山1統 (Ohi1)

結晶片岩類 (黒色片岩) を母材とする山地・丘陵地の尾根筋および凸型斜面上部に出現する、乾性の土壌である。A層はうすく、細粒状構造がよく発達する。残積性のものが多く、B層は割合に深い。土層の深いところでは、アカマツの成育が比較的良好である。

I g 大平山2統 (Ohi2)

この土壌は、大平山1統と同一母材からなり、山地・丘陵地の山腹斜面上部から中部にかけて分布する。A層は比較的発達し、腐植の浸透もみられるが乾性の環境条件下にあり、粗粒状および堅果状構造が、よく発達している。B層は淡色を呈するが、土層は比較的深い。

赤色土壤

土壤浸食、あるいは人為的な削剝によって赤色心土が裸出し、その上に再び土壤生成が行なわれているものを、これに該当させた。

I h 錦山統 (Nis)

この土壤は、表層上部がわずかに腐植により汚染を受けているのみで、非常に赤味の強い土壤で、土層は深い。特徴層は2.5YRの色調を示し、明赤褐色ないし明橙色で、粘性の強い埴土よりなり、下層はとくに堅密に堆積している。表層は割目や堅果状構造のみられることが多い。

暗赤色土壤

蛇紋岩や石灰岩を母材とする、一般に、埴質緻密で有機物の浸透がすくなく、赤色土より暗色味を帯びている。

I i 黒岩山 (Kur)

蛇紋岩を母材とする乾性土壤で、表層は、暗褐色～黒褐色で比較的うすく、下層は赤褐色(5YR)を呈する。表層・下層とも埴質緊密で理學性が劣り、林木の生育は不良である。

資 料

- 1 山口県林業試験場(1956～1968)：民有林適地適林調査報告
- 2 経済企画庁(1969)：土地分類基本調査(防府)
- 3 経済企画庁総合開発局(1973)：縮尺1/20万土地分類図(山口県)

(藤原 俊廣)

II 台地・低地の土壤

砂丘未熟土壤

周防灘海岸の砂丘にあってA層の発達がきわめて浅い砂質の土壤である。

II a 岐波統 (Ki)

海に沿った砂丘上の砂質の土壤である。土地利用は主としてクロマツの人工林、宅

地で、面積は狭い。

赤色土壌

この土壌は、古生層の一部、洪積層の一部に分布している。表層腐植層はなく、下層土の土色が赤色（2.5 Y R～5 Y Rで彩度6以上明度3以上）で、土性は強粘質である。土地利用は畑である。

II b 赤羽根統 (Akb)

表土は粘質～強粘質で腐植を含む。下層土は赤色で強粘質である。畑地として利用され面積は狭い。

黄色土壌

この土壌は台地や緩傾斜地に分布している。

表層腐植層はなく、下層土の土色は明褐～黄褐（2.5 Y～7.5 Y R彩度3以上）で土性は壤質～強粘質である。

本土壌は残積（崩積の影響が強い）三紀層および洪積世堆積土からなり、水田土壌化作用が深層まで及んでいない。

II c 矢田統 (Yad)

表土は粘質～強粘質で腐植を含む。下層土は黄色で強粘質である。酸化沈積物はなく、畑地として利用されている。

II d 北多久統 (Kit)

山麓斜面や台地に分布する黄褐色の水田土壌で、土性はほぼ全層強粘質であり、土層中に斑鉄のほかマンガン結核を含む。未風化ないし腐朽礫を含むこと多く、60cm以下に礫層または未風化～腐朽岩盤が出現することもある。

II e 新野統 (Ara)

山麓斜面や台地に分布する黄褐色の水田土壌で、北多久統と異なる点は土性が粘質であることである。

細粒灰色低地土壌

本土壌は作土下の土色が灰色～灰褐色を呈する土壌で作土下50cmの平均土性が粘質～強粘質のものである。本土壌の灰色または灰褐色土層は水田土壌化作用によって変成したB層で、斑鉄を含み、ときに鮮明なマンガン結核が見られる。

II f 宝田統 (Tak)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が粘質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

灰色低地土壌

本土壌は作土下の平均土性が壤質よりなる灰色～灰褐色の水田土壌である。それ以外の内容は前述の細粒灰色低地土壌と同じである。

Ⅱ g 清武統 (Kyt)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が壤質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

粗粒灰色低地土壌

本土壌は作土下の平均土性が砂質よりなるが、または30～60cm以内もしくは30cm以内より以下が礫層または砂礫層よりなる灰色低地土壌を包含する。

Ⅱ h 豊中統 (Toy)

低地に分布する粗粒灰色水田土壌で、ほぼ全層が砂質よりなる土壌である。主として河川堤防ぎわまたは干拓地などの地下水の低い排水良好なところに見られる。

細粒グライ土壌

本土壌は表層が灰色土層よりなり、下層がグライ層よりなる土壌と、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌のうち作土下の平均土性が強粘質または粘質のものである。

Ⅱ i 川副統 (Kws)

表層は灰色土層、下層グライ層よりなり作土下の平均土性が強粘質の土壌で低地に分布する。土層中にはマンガン結核を含むことが多い。

Ⅱ j 千年統 (Tit)

表層は灰色土層、下層グライ層よりなり作土下50cmの平均土性が粘質の土壌で低地に分布する。

グライ土壌

本土壌は作土下の平均土性が壤質よりなるグライ土壌を包括したもので、その他の内容は細粒グライ土壌の項で説明したものと同様である。

Ⅱ k 上兵庫統 (Khy)

低地に分布し、表層灰色土層下層グライ層よりなり、作土下50cmの平均土性が壤質

の土壌である。本統も上層下にマンガン結核を含むことが多い。

粗粒グライ土壌

本土壌は作土下の平均土性が砂質よりなるか、または60cm以内から以下が礫層または砂礫層よりなるグライ土壌を一括したものである。

Ⅱ 1 八幡統 (Ywt)

低地に分布する表層灰色土層、下層グライ層よりなる土壌で、土性はほぼ全層砂質である。

Ⅱ m 琴浜統 (Kot)

ほぼ全層が砂質のグライ層からなる土壌である。斑紋はほとんど存在しないか、たとえ存在しても表層30cm以内にすぎない。

資 料

- 1 山口県農業試験場（1962）施肥改善事業成績書
- 2 山口県農業試験場（1964）研究報告17号
- 3 山口県農業試験場（1963）地力保全基本調査成績書
- 4 農林省農業技術研究所（1972）土壌統の設定基準および土壌統一覧表（未定稿）
- 5 経済企画庁（1969）土地分類基本調査図幅 1/5万〔防府〕

（坂上 行雄 井尻 敏文）